年頭のごあいさつ

理事長　人見　光太郎

新年おめでとうございます。渡辺薫名誉理事長の後を継いで二度目の新年を迎えます。

多くの先輩諸兄が営々と築きあげてまいりました立教志塾の歴史と伝統を引き継いでいくには、菲才の身には余るものと痛感させられている毎日です。お引き受けした以上、やるしかないと開き直るしかないと思っております。

私は就任するに当たり、以下の三点をあげました。

一、従来の事業の見直し

マンネリ化した事業の再検討や時宜に叶わなくなった事業の検証等を揚げたのでしたが、正直言って代わり映えしない事業を、しかも拡大再生産どころか縮小して続けたとの感を強くしております。反省する所、大であります。

二、時代のニーズに合った事業の展開

何を時代が求めているのかを、大衆討議にかけたり、アンケート調査をしたりして認識し把握する事を考えておりましたが、実施するには至りませんでした。大変残念でしたが再度検討していきたいと思っております。

三、会員増強を計る

二十代の青年の入塾がありましたが、果して次代のホープたり得るでしょうか。その他数人の入塾者は若者ではありませんでした。この項目も所期の通りではなく残念に思っております。内部では最近の若者は、群れたがらないとか、人との付き合いが苦手だったり、好まないとか話し合っていますが本当にそうなのでしょうか。私達の努力不足の言い訳にしているに過ぎないのではないでしょうか。反省しきりです。

立教志塾が目指す、まちづくりは人づくり、人づくりは我づくりからとするならば、我づくりの為の努力精進は欠かせません。

インド独立の父、マハトマ・ガンジーは「明日死ぬかのように生きよ、永遠に生きるかのように学べ」と言って、生き方と学びの大切さと覚悟とを説いております。

かの孔子先生も論語冒頭の学而第一で「学びて時に之を習う、また悦ばしからずや、朋遠方より来る有り、また楽しからずや、人知らずして慍みず、亦君子ならずや」と仰っておられます。同好同学の士を大いに求め、仲間にしたいものです。

南湖神社創建に大いに貢献された渋沢栄一翁は「四〇、五〇は洟垂れ小僧、六〇、七〇は働き盛り、九〇になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」と言っております。

本年の干支は庚子（かのえね）です。庚は更新の字義があり、成果の収穫や古い姿からの脱却を意味するとのことです。子は新たな陽気の萌え始める意味があり、この年は何事も改まり新生される年になると、物の本にあります。

若い者が集まらないと嘆く前に皆が若返ってみませんか。一生涯、勉強のつもりで初心にかえって本気で頑張っていきたいと思っております。さすれば追随者も出てくれるものと確信しております。

末尾ながら塾生の皆様にとって本年も健康で幸多い年でありますように心から願って、新年のご挨拶と致します。